令和 6 年度　独立行政法人日本スポーツ振興センター新博物館展示・運営に関する有識者懇談会
（第 5 回）議事要旨

1．日時　令和 6 年 5 月 30 日（木）10：00～12：00

2．場所　独立行政法人日本スポーツ振興センター 外苑事務所

3．出席者
・委員
伊藤卓司委員、大林太朗委員、沓沢博行委員、栗原祐司委員、建石徹委員、田良島哲委員、
柳谷直哉委員
（オンライン）荒木絵里香委員、萩原恒昭委員（計 9 名）
・事務局
JSC 大西（啓）理事、須藤館長、新名学芸員、木村学芸員、三澤主任専門職、寅ヶ口施設部企画調整役

4．議事内容
議題（1）令和 5 年度懇談会の確認
事務局より資料 1、2 について説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。
○自治体レベルではスポーツ関連資料も指定されているため、いずれ国の指定になるものがあるのではないかと想定される。それを前提とし、文化庁の方針に沿って進めるのがいい。
○細かく分けて保管、外部収蔵庫含め分散保管も前提になってくるだろうが、システム面ではそれらをどのように管理等していくのか。データベースや資料場所の管理等、今後の予定を知りたい。
○収蔵庫は、ものの形ベースで配分されており寄託品も多いだろうが、寄託か収蔵品かの区別ではなく、ものベースで置いていくのか。
○事務室の議論はあまりしてこなかった。資料等増えて、どんどん狭くなっていくのではないか。事務室がこの面積で大丈夫か確認したい。
○エントランスホールで収蔵品を見せるのはいい考えだが、入れ替えがどれ位可能か、明るい場所で古い収蔵品自体を見せるのか、または市販のものをデザイン的にみせるのか、実物資料を展示するのかなど、検討してほしい。
○スポーツインテグリティや環境対応、更に SDGs といった観点からも工夫は必要。但し、環境に知見がある方々からすると、そうした象徴的なものよりも、二酸化炭素、廃棄物などの排出量や水や木材などの資源の使用料や調達先といったもののデータ収集や可視化の方が重視されるので、設計段階から想定しておくといい。将来的には第三者認証を取得すべきという要請も出てくるかもしれない。具体的には電気や空調設備のメーター等もそうしたものを意識して設計するといい。他の施設でも、設計段階で考慮していなかったためにデータ収集に苦労したという話を聞いたことがある。
○収蔵庫の見える可というワードが気になっている。新博物館の半分以上は収蔵庫エリアなので、ガラス張りにして通路を作り、収蔵品には触れられないが収蔵庫内にあるものをアピールできると面白いの

ではないか。スポーツ選手のバックヤードの活動が見たい、聞きたいという人々も多く、収蔵品に興味がある方に、ミュージアムのバックヤードも披露できるといい。

○バックヤードをみせるのはすごい人気だが、セキュリティの観点から難しさもある。外部収蔵庫ではその可能性も検討してみるのもいい。

議題（2）令和 6 年度有識者懇談会の意見交換予定について

事務局より資料 3 について説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。

○博物館の柱、どんな目的や使命でやるのかをしっかり決めることが大事。

○海外を含めた他館の入場料を参考資料として準備してほしい。

○スポーツミュージアムネットワークについて、大変重要なので国際的な検討をしてほしい。シンポジウムも是非開催をお願いしたい。

○図書館機能の切り出し方は、収蔵庫の面積問題と関連して、かなり大きな課題となっており、いつまでも先送りにすることもできない。単に置き場所をつくるのではなく、図書機能をどう活かしていくか、本を置くだけではどこも引き受けてくれない。置かれた場所にもメリットがないとなかなか進まないだろう。

○少子化のため大学のキャンパスも空き始めているという話を聞く。公開型の博物館となれば、大学にもメリットがある。廃校よりは大学の中の方が建物環境はよいだろう。収蔵庫利用も含めて探してほしい。

○新博物館が開館したら、スポーツ関係の日本のナショナルセンターになる。大学が担うような研究的な要素も入ってくるだろう。スポーツミュージアムネットワーク以外にも、今ある、またはこれから想定されるスポーツの大学のネットワークも既存のものがあるだろう。どんなネットワークがあって、どんなネットワークを作っていくべきなのか。そのハブが貴館になるはずなので、情報収集をお願いしたい。

○学術的なネットワークでは学会があり、具体的には体育・スポーツ史学会やスポーツ人類学会などが挙げられるがそことの情報共有を行っていくことは長い目で見て必要になる。大学同士のネットワークだと、東京 2020 に向けて組織委員会と連携して事業を推進させる大学は 800 程度あったと記憶しているが、「大学連携レガシーネットワーク」というプラットフォームとして継続されているので、協力できる機会もあるだろう。

○体育・スポーツ系学部を有する大学には学芸員養成課程を持っているところもあるので、博物館実習に活用してもらう方法もある。ネットワークは色々あるので、それらも視野に入れていただきたい。

○スポーツは無形文化財だ。当事者（競技者）の資料収集や運営等に関する理解も重要。スポーツ全体の競技者ネットワークは存在しないかもしれないが、競技者の団体はあるのか。そういうところへの働きかけ方等あるのか。

○オリンピック関係だと、オリンピアンズ協会という団体があり、過去のオリンピックに参加した競技者は全員登録され連絡は取り合える。事務所はオリンピックスクエア 4 階にあり、毎年総会や懇談会などもやっている。

○パラリンピック関係でも、日本パラリンピアンズ協会という組織がある。パラリンピックで日本代表選手を派遣するためには、競技団体が日本パラリンピック委員会(JPC)に加盟する必要がある。その JPC は、健常者スポーツの JSPO と同様に普及・振興の役割を担う日本パラスポーツ協会の内部組織となっ

ていて、国内で認められたパラスポーツの競技団体は加盟している。加えて、各都道府県・政令市にはパラスポーツ（障がい者スポーツ）協会が 60 程度あり、ここにもネットワークがあって年に 1 回（3 月頃）全体が集まる会議もある。

○オリンピアンズ協会は、現役や現役に近い方々にも声掛けして増やしていきたい。引退後も色々な場に関わっていくのは、オリンピアン自身にとってもいいことであるため、スポーツ博物館と繋げてやっていきたい。

○SDGs も非常に大事。ヨーロッパの美術館等では二酸化炭素を出さないような動きもある。海外から資料借用の際もジェット機を使わないとかバーチャルクーリエなどの試みもあり、貸出先にも同様の意識が求められる可能性もある。できるだけプラスチックを使わないなど、ソフト面でも議論は必要。

会議閉会に際して、事務局から議事要旨作成後に確認を依頼する旨事務連絡があった。

（以上）